

氏名（本籍）	志 ^シ 田 ^ダ 雄 ^{タケ} 啓 ^{ヒロ} （東京都）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第96号
学位授与年月日	平成19年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉日本人の美意識に基づくオペラの創造
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 直野 資
（演奏審査主査）	〃 〃（〃） 直野 資
（演奏副査）	〃 〃（〃） 伊原直子
（〃）	〃 助教授（〃） 杉本和寛
（論文審査主査）	〃 〃（〃） 杉本和寛
（論文副査）	〃 教授（〃） 直野 資
（〃）	〃 〃（〃） 伊原直子

（論文内容の要旨）

「日本人の私がオペラを表現する意義とは何か？」

この疑問こそが私の研究活動の出発点になっている。私は東京芸術大学においてオペラを専攻する学生として、西洋の語学、歴史などを学び、また実技としてオペラにおける表現法、ものの考え方など様々なことを学んできた。ただ、オペラを勉強すればするほどその面白さを実感する一方、それは日本人の私が持っている美的感覚とは明らかに違うものだと実感した。

西洋の文化が観衆に対しあらゆる情報を与え、いかに舞台と観衆が一体となりカタルシスに到達するかということを目指すものに対し、東洋の、特に日本の文化は、例えば枯山水の庭園などに代表されるように、「石」という限定された材料と、極度に簡素化された造形という限られた情報量の中で、各個人個人がそれぞれ自由に想像を働かせ、精神の奥底でしみじみと感じ、感動へ至るという相違がある。

私は日本人の美的感覚は西洋人が持っているものに比べると、三次元的な広がりをもっているように感じる。それはある対象と接した時に自分が想像／創造する自由な感覚に関係していると思われる。例えば枯山水の庭園を目の前にした時、ある人は荒れ狂う日本海を想像する人があれば、ある人は山奥の静かな溪流を想像するといったように個人によって差異が生じることになる。一方西洋の芸術ではどうであろうか？舞台芸術を例にとれば、その最大の目的は観客と舞台が一体となり、カタルシスに達するその行為、その瞬間がそれだといえるであろう。しかし舞台と一体となるほどの興奮状態に陥ると、そこに先のような自分の想像／創造を持ち込む余地は少なく、日本の文化に比べると二次元的な印象を受ける。「日本人の私がオペラを表現する意義とは何か？」ということは、まさにこの感覚の相違という点にこそ存在するのではないかと考える。

本研究は、私が修士論文で研究を行った「ブレヒトの叙事詩的オペラ研究」の構想と博士に進学してからの研究を基に、実際にその構想を博士リサイタルという舞台に取り上げて公演したという事に最大の特徴がある。公演を行うにあたり、能楽の野村四郎先生（人間国宝、東京芸術大学名誉教授）、鍛金の宮田亮平先生（東京芸術大学美術学部教授）、オペラ科の諸先生方、また美術、音楽、邦楽の学生の皆様に温かいご協力を頂いた。美術、音楽、邦楽の皆様が参加し、ひとつの舞台を制作できたという事は、

私にとって最大の幸せであると共に、机上の構想を他分野の皆様と意見を戦わせる事で、新たな発見を伴う舞台を制作する事が出来た。

本論文では、まずブレヒト (Bertolt Brecht脚本家、演出家 1898～1956) の異化効果について明確な定義を行う。彼の著書の中で「東洋の演劇ではすでに異化効果が確立されている」という項目があり、異化効果がどのようなものであるのかを明確に把握すれば、舞台の創作において大きな手がかりが得られるのではないかと考察した。

次に、日本人が本来持っている美意識を理解する為、能楽の研究を行う。能楽は、大陸から渡来してきた舞台芸術を、観阿弥、世阿弥、禅竹などの天才能楽師の手により、能楽へと発展させたものである。これは、外国から輸入された舞台芸術を日本人の美的感覚に合った舞台芸術に発展させた最古の例である。ゆえに、私は日本人の舞台芸術に対する美意識の根本が能楽にあると考えている。本論文では、風姿花伝などの最古の書物と共に、現代活躍されている能楽師の談話を取り入れ、より実践に即したものとする。また、私が博士在学中3年間、野村四郎先生に仕舞の稽古を付けていただいた経験も併記する。この研究を実践に即したものにすることで、舞台の創作において大きな手がかりが得られるのではないかと考えた。

次に、全博士リサイタルについてまとめたものを記載する。その事により、第1回、第2回、第3回と博士リサイタルを重ねていった結果、公演理念、目的、様式等に、どのような変遷があったのかということを確認したい。その方法として、各公演の目的を表示、その目的に対してどのような成果が得られ、またどのような問題点が発生したのかということと、公演ごとに得られた成果、問題点が、次公演においてどのように活かされているのかという、各公演の関連性を述べる。

最後に、この論文の結論として、今まで行われてきた博士リサイタルの成果、問題点をまとめ、それらを踏まえ、次回の作品をどのように行うかという事を記載する。この研究は、前例がない研究である。このような試みを行っている他の例がないため、私が東京藝術大学の博士リサイタルで行った公演が前例となる。前例である今までの公演の成果を踏まえ、どのように次の博士リサイタルを行うのかということを確認する事が最新の研究であり、それをもって結論とする。

私はこの研究を通して、日本の奥深い伝統的美意識が根付いた、舞台芸術の一つの可能性を示していきたい。